

令和六年度 四日市市立博物館紀要 研究論文

四日市の雅称「洒水」の由来について

廣瀬 毅

四日市の雅称「泗水」の由来について

廣瀬 毅

はじめに

泗水しすいとは、歴史上有名な思想家、孔子が生まれた地（魯国昌平郷鄒邑、現在の中国山東省曲阜市）を流れる川の名（現在は泗河と呼ぶ）です。そこから派生して孔子の教え（儒学）を「泗洙」「泗上しじょう」、「泗水の学」と呼び、論語を始めとする漢文を学ぶ人にとっては、聞きなじみのある言葉となっています。

本稿は、この泗水しすいを伊勢国三重郡四日市の呼び名として使った経緯を探り、その由来とされる二つの説について検証していきます。

四日市の支配

四日市の中心にある大字四日市は、江戸時代の始めから幕府直轄地でしたが、享保九（一七二四）年六月から享和元（一八〇一）年十二月までの七十八年間は郡山藩領、それ以降は再び幕府直轄地として治められた歴史があります。

近代になると大津県、度会県、安濃津あのつと管轄が変わり、明治五（一八七二）年に県庁を安濃郡津町から三重郡四日市町に移しました。それを機に安濃津県の県名は三重県と改められました。

城下町の津に比べて、宿場町の四日市は、幕府代

官所のあった陣屋跡の周囲を町家が建ち並び、役場を置く場所は陣屋跡の他に無く、手狭だったこともあり、一年ほどで県庁は再び津町に戻りました。しかし県名の再度の変更は行われず、現在に至っています。

その後、明治二十一年に制定された市制町村制と、同二十三年に制定された府県制・郡制により、四日市町は三重郡役所の監督を郡内の他町村とともに受けることとなります。しかし、四日市町の発展はめざましく、明治三十年に市制を施行し、四日市市となりました。これ以降、郡役所の監督を離れ、県の監督の下、郡役所同等の業務を行うこととなります。

現在、三重郡と四日市市を合わせた地域を「さんし地区」と呼んでいます5が、その表記に「三泗」の漢字を当てています。漢数字としても使う三と四は数字と間違えやすいからか、これを四日市の雅称とする泗水の泗の字を用いることで地域名として認識させているのです。

平成時代になると、鵜の森公園にできた市民茶室の名称が泗翠庵となり、四日市市の水道水をペットボトルに詰めたものを「泗水の里」と名付けて販売するなど、「しすい」の名称は現在も四日市にゆかりのあるものとして用いられています。

では、なぜ泗水が四日市の意味になるのでしょうか。それには現在二つの説があります。一つは、江戸時代の十八世紀にこの地を治めた郡山藩の藩士城

戸月庵とげつあん（諱は賢、字を公賢、号に芙蓉や月庵、通称は友蔵、一七四四〜九九）が、自作の漢詩において四日市を泗水と表記したことになむという説。もう一つは、江戸時代の四日市の中心地、札の辻周辺に四つの井戸があったことにちなむという説です。

泗水と儒学

管見ですが、四日市を泗水と表記したのは、城戸月庵が著わした漢詩集『東帰稿とうきこう』（享和三（一八〇三）年刊、史料一、図二〜五）が初めです。その用法は、四日市という地名を単に泗水と書き表したというもので、四日市に井戸があるとか、四日市の水が良いとかという意味で用いてはいません。

泗水そのものは、孔子の教えという意味で古くから知られている言葉ですが、その儒学との関係性から言えば、著者の城戸月庵は郡山藩の儒者でした。

それに加え、四日市の産土神諏訪神社には文宣王（唐の玄宗帝が贈った孔子の封号）の像（図一）があったことが『四日市市史』（昭和五（一九三〇）年刊、以下「昭和五年版市史」という。）に載せられており、これも四日市において儒学が盛んであった表れとみることができそうです。この文宣王像は惜しくも昭和二十年の四日市空襲で焼失してしまいました。

「泗水の学」が儒学を表すことについては先にも触れたところですが、これが日本語であるという点には注意を要します。儒学を表す表現で泗水、泗上、洙泗学（朱子学ではない）のように漢字のみで表記されるものは、中国から伝わったとみることができ、但し「泗水の学」は日本独自の表記のように思えるからです。

柳里恭と西村馬曹

「泗水の学」は、これも管見ですが、柳里恭の随筆『独寝』（序文は享保九（一七二四）年）が初出です。この中に「我儒は泗水の学にあらず」という文言が出てきます。柳里恭は名を柳沢里恭（一七〇四～五八）、通称を権太夫といい、画人の柳沢淇園としても知られています。柳沢吉保に仕えた父は藩の家老職でした。吉保の子、吉里が甲府から和州郡山へ転封の折に里恭は、城の受取りのために先発し、郡山で書き綴ったものが『独寝』です。彼が二十一歳（以下年齢は全て数え年で記す。）の時の著述とその



図1 諏訪神社の文宣王像（昭和五年版『四日市市史』より）

序にあります。刊行はされず、筆写で流布しました。里恭は自ら好んで中国風の柳里恭と名乗り、長ずるに及んで郡山藩の重臣となりました。多芸多才な人となりは、伴蒿蹊（一七三三～一八〇六）の著した『近世畸人伝』（寛政二（一七九〇）年刊）に取上げられています。

『独寝』については、戯作者・狂歌師の平秩東作（一七二六～八九）がその著『莘野茗談』¹⁰の中で次のように記述しています。

（前略）勢州には好事の士多し。四日市の問屋西村莊右衛門、表徳馬曹とて、文才も有て物にかゝりなる男なり。故有て一年予に憑みて東都へ来り、暫時交を結びし事有き。友人美樹¹¹が門人なり。渠が柳沢権太夫の書れし独寝といふものを所持したり。面白くかきし物なり。今も持居けるかしらず。（後略、ルビは筆者）

ここに登場する四日市宿の問屋場（宿場・駅）の西村馬曹（諱は茂貞、字を節甫、号に馬曹、通称は莊右衛門、一七四五～一八〇〇）は四日市を代表する文化人です。何歳頃の出来事かは不明ですが、東作を頼って一年ほど江戸に滞在した馬曹が、柳里恭の『独寝』を持っていたと記しています。

一般に流布している『独寝』は、幕末頃にまとめられた叢書『燕石十種』掲載のものとはほぼ同じようですが、それは馬曹所持本の三分の一程度の「残欠本」であると、新従吾所好第二編『独寝』の校訂者石川巖は記しています。¹⁴

当時の四日市は郡山藩領であり、『独寝』の写本も容易に手にできる環境にあったのではないかと思われる。さらに馬曹と月庵は共に四日市に生まれ

た同世代（一歳違い）であり、馬曹が両親の長寿を祝って『老伴集』¹⁵（寛政元（一七八九）年刊）を出版するにあたり、月庵が天明八（一七八八）年五月に書いた序には、「西村馬曹吾郷人而兄¹²事我者也（西村馬曹は吾が郷人にして我が兄事する者なり）、其父母則吾父母之執也（その父母すなわち吾が父母の執なり）」（訓点は筆者）とあることから、二人の間柄を窺い知ることが出来ます。

「泗水の学」と「泗水」の表記が、ともに郡山藩の学芸に秀でた藩士の著作に登場するのは偶然でしょうか。両者の年齢の開きや、郡山と四日市の距

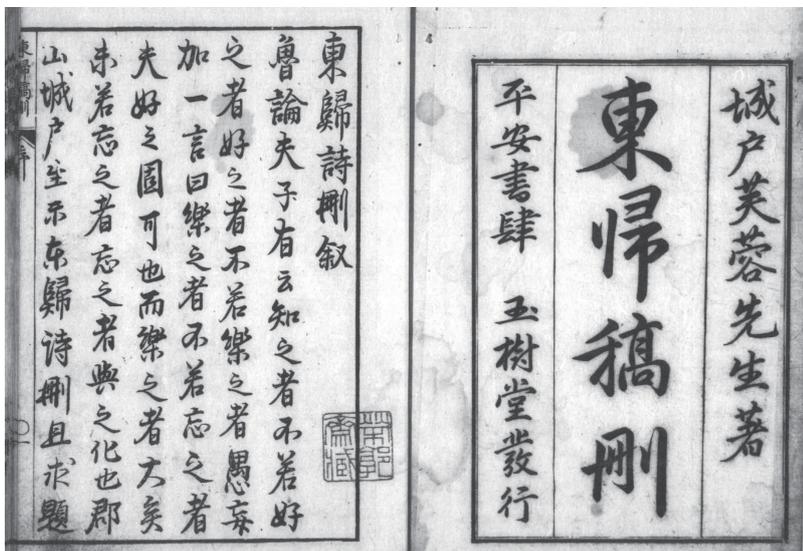


図2 『東帰稿刪』芥川丹邱の叙（国文学研究資料館所蔵、出典：国書データベース、<https://doi.org/10.20730/200010215> 以下同じ）

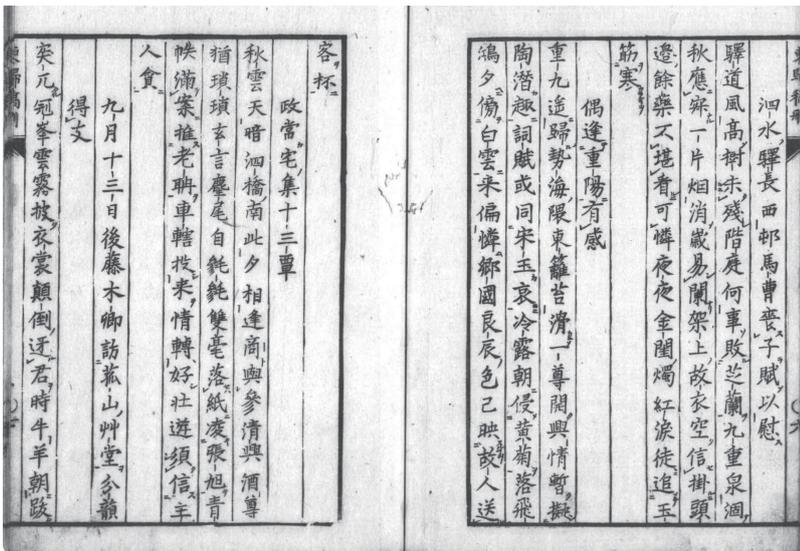


図3 『東歸稿刪』右頁1行目に「泗水驛長西郵馬曹」、左頁3行目に「泗橋」の表現がみえる。泗橋は三滝川に架かる東海道の三滝橋のことと思われる。

城戸月庵について

離を考えると、直接的な関係があったとみるのは難しそうですが、郡山藩の藩士や四日市の人々、また『独寝』やその他の学問を通じてなら、その影響を受けたかもしれません。

柳沢里恭は、柳沢吉保が徴用した荻生徂徠やその弟子の服部南郭らの教えを受けたとされ、物部氏の出自という事から物徂徠と称した徂徠の中国趣味もよく知られています。こうした漢学や師の影響を里恭が受容しているとすれば、「泗水の学」などの表現も別段不思議ではないと思われれます。

城戸月庵の家系について、少し触れておきます。月庵の父、城戸金作（諱は富恭、一七一六～七二）は郡山藩の役人で、四日市の代官所に勤めていました。墓碑銘（史料二）には「為伊勢四日市之掾（伊勢四日市の掾となる）」と記されているので、小役人であったと思われる。明和二（一七六五）年（墓碑銘は三年）に上士の班に列し、安永元（一七七二）年に五十七歳で没したと昭和五年版市史は伝えます。

安永二年、その跡職を月庵が嗣ぎました。幼少の頃から聡敏で博覧洽問の誉高く、同九年に郡山に移り、翌天明元（一七八一）年に藩の京屋敷の役人となります。同六年副大小姓、翌七年大小姓となって郡山に戻り、寛政五（一七九三）年に藩侯（柳沢保光）の命により儒官となり、同十一年に五十六歳で没しています。大和郡山市外川町の発志禅院（以下、発志院という。）にある月庵の墓碑銘（史料四）には、「郡山及四日市学芸之盛皆頼先生訓導之力也（郡山及び四日市の学芸が盛んなるは、みな先生訓導の力によるなり）」（訓点筆者）と刻まれ、昭和五年版市史は月庵の教えは四日市の人々に浸透して、「当地の学芸は隆盛を見るに至った。」と記しています。

月庵の弟で杉山家を嗣いだ杉山重水（諱は政常、字を子友、号に重水、通称は周助、一七五三～一八〇七）もまた、郡山藩の儒官となり、文化四（一八〇七）年に五十五歳で没しています（史料五）。月庵の子、城戸駒嶽（諱は富一、字を止敬）も郡山

藩の儒臣となっています（史料六）。

泗水の使用例のひろがり

月庵の『東歸稿刪』は月庵没後の刊行ですが、所収の漢詩「泗水行」には、京都伏見の漢詩人で儒学者の龍草廬（一七一四～九二）の序があり「天明紀元辛丑秋」（一七八一年）と記しています。月庵が父の跡を継いで四日市の掾（代官所の役人）となったのは三十歳の時、郡山藩の京屋敷に勤めるように

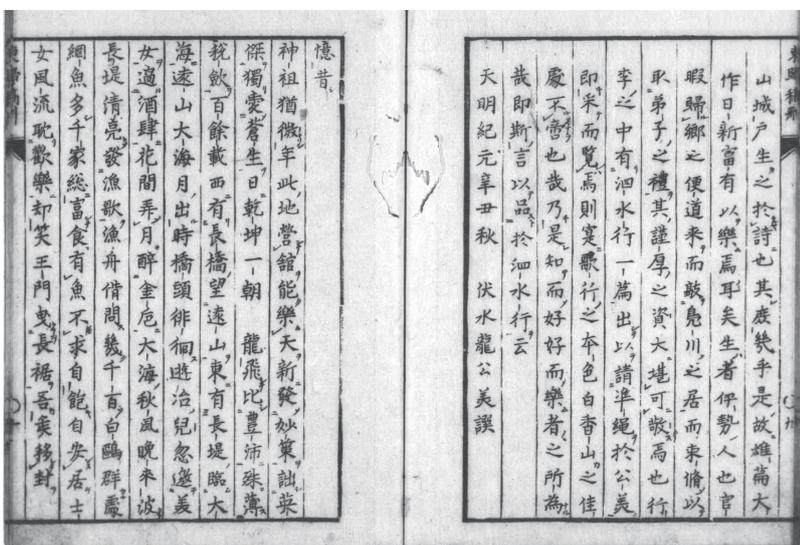


図4 『東歸稿刪』「泗水行」の序（右頁）と詩（左頁）の部分。序は龍草廬の撰。右頁2行目から4行目にかけて、月庵と龍草廬の出会いが描かれている。

なつたのは三十八歳の頃です。京勤めの折に龍草廬との交流ができたようで、『東帰稿刪』の中にも龍草廬を詠った詩がいくつかあります。

その泗水という言葉ですが、月庵以外の人々に使われていたかについては、同時代と思われるものが少例知られています。

「寛政泗水郷友録」という資料が昭和五年版市史に掲載されています。これは四日市の文化人名簿ともいべきもので、学者、詩文家、天文家、書家、画家の五つの分類により、人名と号、居住地が三十一人分（重複あり）記されています。残念ながら、この資料が誰の所蔵で、現在も存在しているのかどうかはわかりません。

似た書名で先の改訂版と思われる「改正泗水郷友録」²⁰（昭和三十二（一九五七）年筆写本、原本未確認）が、四日市市立図書館に所蔵されています。詩文、医師、書家、画、和歌など百二十七の分類に七百二十九人分（寺の名や重複あり）が記されています。これら二つの資料の詳細については朝倉治彦氏の紹介に詳しいので触れませんが、「寛政泗水郷友録」は書題のとおりであれば寛政年間のもものと推定され、「改正泗水郷友録」はその内容からみて文化四〇五年（一八〇七〜〇八）頃の成立と考えられます。どちらも「刊行されたものではないから、四日市方面で編さんされた流布の狭いものであろうが、四日市の心意気を示したものと解される。」と朝倉氏は記しています。²²

また寛政三（一七九一）年に記されたと思われる「四日市古跡夢扒」²¹は、『布置屋草紙』の著者である古谷久語の子孫の古谷家に伝わるものですが、こ

ちらも現在、その原本は見当たらず、昭和二十九年の筆写本のみが四日市市立図書館に残されています。著者は未詳ですが久語自身かもしれません。²⁴ 四日市の名所や歴史を書き連ねていて、当時の雰囲気をよく伝えていきます。この中に「四水駅」や「四水八景」の言葉が出てきます。筆写本なので断定はできませんが、漢字が「泗」ではなく「四」であるところが、儒学的な意味合いを知って使ったというよりも、四日市を「しすい」と表現することがある程度認知されていたという事を示しているのかもしれない。

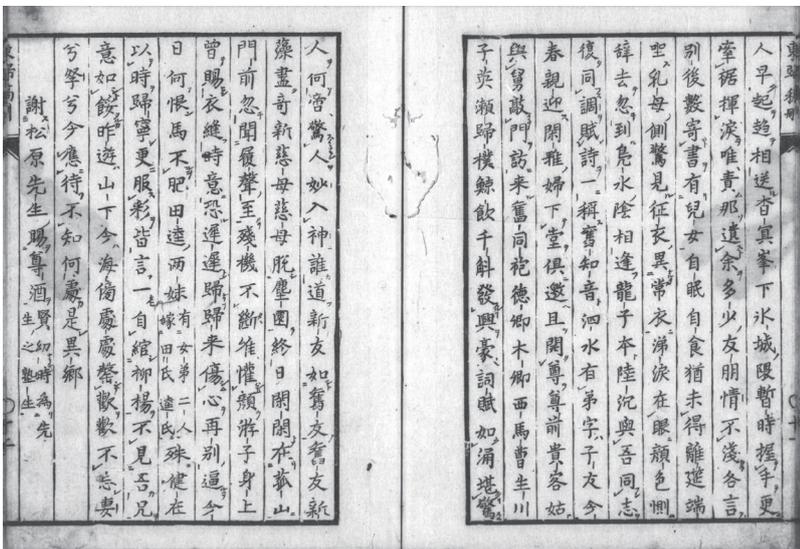


図5 『東帰稿刪』「還郷歌」の一部、右頁6行目に「泗水に弟有り」、8行目の訪れる旧友に「(光本) 徳卿」「(後藤) 木卿」「(西(村) 馬曹」「(生川) 子英」らが載る。

もうひとつ、こちらも実物は未見ですが、「黒澤翁満」という渡辺刀水の著書に引かれているものがありますので、次にその一節を引用します。

桑名の畏友竹内篁園君から示された翁満の手簡の一節に、

……愚父今以泗水（四日市の雅称なり）に居申候に付折々は罷出、不相替御世話に相成申越候、乍此上何分く奉頼候……

之は忍に移転後、桑名の竹内真々斎、其息子弥兵衛、同孫左衛門三人連名宛のもので、父の事を頼んだ手紙である。此の父は遂に忍には来なかつた様である。

文政十一（一八二八）年頃とされる手紙で、黒澤翁満が四日市の意味で泗水を用いているのがわかります。文政六年、桑名藩主松平忠堯は武蔵国埼玉郡忍に転封となり、藩士の翁満も移りましたが、翁満の父は伊勢に残っていたことがわかります。括弧書きが翁満の筆なのか、渡辺刀水の注釈なのかは判然としませんが、翁満は国学者でもあったことから、この雅称を使ったのかもしれない。

天明頃から文政頃までの五十年ほどの間は、少例ですが、泗水の使用が確認できました。その多くが、学者や文化人の間でみられたのは偶然ではないでしょう。使用例が少ないため、今後、さらに資料が発見されるのを俟ちたいと思います。

泗水以外の雅称

四日市の文化人の作品が掲載された寛政二

(二七九〇) 年刊の『寛政庚戌歳旦集』²⁸という年頭に詠んだ和歌や俳句も収める漢詩集には、序文や跋文、また漢詩にも四日市を「四市」と表記している例がありました。泗水以外の四日市の雅称とみて良いでしょう。先述した「寛政泗水郷友録」とも重なる人々(十五人、月庵はいないが弟の杉山重水は載る)の作品も掲載されているこの漢詩集には、泗水の表記はありません。

『寛政庚戌歳旦集』は『東帰稿刪』より十三年ほど早く刊行されていますので、四日市の雅称が四市になる可能性もあつたわけです。しかし、現在に至るまで四日市の雅称として泗水が使われていることを考えると、一見してわかる四市よりも、泗水の方が理解する素養を必要とすることや、発音も「しし(しいし)」に比べ「しすい」の方が認知しやすいくということがあつたかもしれません。

寛政四年に菰野藩士の森正綱²⁹が記した「傾蓋漫録」³⁰は、木村兼葭堂³¹(一七三六―一八〇二)が大坂を追放され、長島藩主増山雪齋³²の庇護により三重郡川尻村(長嶋藩領、現四日市市川尻町)に仮寓していた時の正綱と兼葭堂の交流の記録です。

兼葭堂が菰野の正綱の家を訪れ、そこに「盃に花」の絵が掲げられているのを見て、兼葭堂はその絵が柳淇園(柳沢里恭)の作であることに気付きます。実は兼葭堂は八歳の時、父の友人宅に滞在する柳沢淇園に絵の手ほどきを受けていたのです。正綱は淇園の絵は誰から伝わったものかと問われ、四駅の井島³²の隠居が余に恵んだものと説明しています。

四駅は四日市の宿場(問屋場)を表し、四日市の町自体を四日市宿とも呼ぶことから、これも四日市

の雅称とみることができません。

城戸月庵が四日市を表すのに、泗水を使ったのはなぜでしょうか。これは、泗水が漢詩の中で使われていることを考えると、四日市の表記に三文字を費やすより、二文字の雅称で表現した方が詩的であるということではないでしょうか。先ほどの『寛政庚戌歳旦集』は四市、「傾蓋漫録」は四駅と表記したように、郡山藩を表すのに郡藩、京都を表すのに京師や洛中、菰野を表すのに菰山など、文字のイメージで土地の印象を表そうとしていると思われるのです。そうすると泗水には、四日市が水にゆかりのある土地のようにも思えますが、これはそうではなく、あくまでも学芸(主に泗水の学)が盛んな地という意味と、泗と四の文字の相似から泗水と表記したとみるべきでしょう。

但し、四日市の光運寺にあつた月庵の墓碑銘(史料三、図六)や、大和郡山の発志院に残る月庵の墓碑銘(史料四)には、四日市のことを泗水ではなく四日市と記しています。これは、月庵ゆかりの人に よる撰文なので、泗水の表現を用いていないこと自体は不思議ではありません。しかし、碑文には京師や郡藩という表現が使われていることを考えると、地名そのものを言い換えることに抵抗はなく、四日



図6 泊山靈園光運寺墓地にあった城戸月庵の墓(昭和36年版四日市市史より、現在は不明)

市を泗水と表現するのに何か躊躇があつたのではないかと感じます。儒学を表す泗水という言葉で四日市を表すことに、儒者たちは気乗りしなかつたのではないのでしょうか。

近代の泗水の使用例

ここからは泗水の使用例についてみていきます。江戸時代の使用例の多くは漢詩文を始めとして、いわゆる文化人の使用にほぼ限られていたのは前述の通りです。明治になると、まずは教育、次いで文芸において泗水の使用がみられます。

明治五(一八七二)年に豎町(現四日市市中部)の東陽寺に泗水義塾が開設されます。昭和五年版市史では英語義塾とのみ記されていますが、明治五年八月時点では泗水義塾となっています。³³

明治十年発行の『納屋小学開校祝辞集』には、七十人を超える人々の開校の祝辞が掲載されていますが、その中に、ただ一人、四日市学校の補助教員熊沢太郎の祝辞に「泗水ノ地タルヤ勢国第一ノ佳港ヲ占メ人民最輻輳ス」とあり、四日市の町を泗水と表しています。

明治十一年、名古屋の青木樹堂(一八二五―八一)が東京を出発して東海道を西へ進む際、四日市で「泊泗水駅玉川楼阻雨」という七言絶句を詠んでいます。泗水駅という表現は宿場町としての四日市のこと、玉川屋という旅館に泊まったのでしょう。これは、明治二十年発行の『樹堂遺稿』に載ります。

明治十二年発行の『よまほろちんがら団団珍聞第三百一十一号』の問題の回答者欄に「伊勢泗水」と「泗水胡逸如何」の筆名が載り、両者とも四日市の人と思われれます。

明治十五年発行の『開化算術通書 上』では編者の序の最後に「明治十三年仲春於北勢泗水寓舎」とあります。編者の長井忠三郎は洞津（津）の人ですが、出版人が四日市の伊藤善太郎であることを考えると、長井が編集のために一時、四日市に滞在し、それを泗水寓舎と表したと想像されます。

明治十四年発行の『掇英園如蘭吟草』³⁴は四日市の教育者大賀旭川（二八一九〜一九〇六）の関になる漢詩集で、その中に本人（伊勢）堀田健次郎の三つの詩が掲載されています。「春日郊行」、「三滝橋納涼」、「泗水」です。その「泗水」を次に載せます。

泗水繁華冠勢国。街衢平広画楼連。請看波止場中月。常泊西三蒸氣船。^{批点}

は大賀旭川によるもので、この詩の眼目となるところを評しています（さらに高い評価は○^{眼点}が付く）。分ち書きの「信然」は、「その通り」の意味です。ここでも四日市の町を泗水と表しています。

この漢詩集を発行した書肆も泗水書林宝雲堂（伊藤善太郎）という四日市の書肆です。

明治十八年発行の『四日市学校開業一班』は、四日市学校の校舎の新築を祝した式典で披露された祝辞が多数掲載されています。その中に浜田学校学務委員の三輪猶作は四日市学校を「泗水校」と呼び、浜田学校長の西村寔肅は、「泗水ノ地ハ天下五要港ノ亜位ヲ占メ卯酉水陸ノ咽喉」と四日市の町を泗水と呼んでいます。同書に四日市学校を始めとして四日市と表記するものが九十例を超えることも付け加

えておきます。

明治十九年に八巻道成により泗水商工会が設立されました。同年発行の『大日本全国風雅の友一名風交の手引』や同二十二年発行の『千草叢誌』には、四日市出身や在住の投稿者が泗水の誰と記されています。余談ですが、千草叢誌の投稿者の一人に、四日市の泗水美雨（泗水港美雨、茅屋庵美雨、四日市茅屋庵とも）がいます。漢字は異なるものの、現在、四日市けいりん公認バーチャルユーチューバーの泗水美海^{みう37}より百二十九年も前に存在していました。

明治二十年発行の『於伊勢見八芸八菟九集』は、四日市を中心とした北勢の文芸誌として発行されたものですが、こちらも投稿者の居住地を示す地名には泗水や在泗水が多いです（第一号三十二人、第二号三十三人、第三号三十四人）。日永や六呂見とおぼしき人は北勢と記し、浜田の一部である江田の地名もあることから、泗水は大字四日市と意識されていたことがわかります。また、『八菟九集』第一号には、長唄として「泗水の四季」が記載されています。実に潔き三滝川の実に潔き三滝川の清き泗水に清やかに声もゆたけき白魚うり白魚々と呼ぶ声も（以下略）

と、三滝川の流れを泗水と表現しています。

また同じく第三号には、流行群歌として、
三滝川清き流れの甲斐ありて古きを滌き新しき
進歩々々と月に日に進む泗水の賑いは三府五港
に異ならず（中略）

とあり、こちらの泗水は四日市の町そのものを表しています。

明治二十二年発行の『近世商工業沿革略史 附録

名家実伝』にも、伊藤小左衛門の項に「凡ソ人ノ泗水ヲ過クルモノハ必ス此屹然タル褒碑ヲ諏訪詞前二観ルナラン」（ルビは筆者）や「泗水今日ノ盛況ヲ致シタルハ蓋偶然ニアラス」と泗水が四日市の町の意味で使われています。

明治二十三年発行の『三重名所図絵 再版』では、「四日市町 一名泗水」と紹介し、同二十六年発行の『三重県下商工人名録』では、「四日市町（雅客ハ泗水ト称ス）」と記します。また同年に出版された囲碁雑誌『五連定石』を泗水堂が印刷しています。

明治二十八年発行の『泗水実業革新論 附餅歌漫録』は森永判四郎（餅歌）の著作で、四日市港や四日市の発展についての提言が記されています。

明治三十年発行の『田園文学十二号』に載る下田義天類の「史伝 愛新覺羅氏」の中には、言葉の言い換えで人物の品格が変わる例として「其の甚しきに至りては津へ来る事を洞津行と云ひ四日市行きを泗水行と云ひて飲べる人もあり。」と記しています。当時、下田は伊勢神宮の神職でしたから、こういう表現を使ったのでしょうか。

明治四十年発行の『風俗画報三五五』に泗水菴なる人物の「伊勢四日市」の記事が掲載されています。

大正二年の新聞『新愛知』二月二日号の社説「海陸交通機関 何んぞ遺憾なく利用せざる」や同年十月三日の記事「泗水築港問題 内蔵両省の見解」の中で、四日市港のことを泗水と表記しています。泗水の表記は明治時代にも四日市町の代わりに港町四日市の意味で使われていましたが、四日市港自体を泗水と表記するようになっていきます。新聞記事は限られた紙面に多くの情報を載せるために、略語を

年代	用例	意味合い	出典
天明 元 (1781)	泗水行、泗水駅、泗水、泗橋	四日市のこと。漢詩や題に使用。泗橋は三滝橋か。	『東帰稿刪』(1803)
寛政年間 (1789～1801)	泗水	四日市のこと。書題。	『寛政泗水郷友録』(1789～1801)
元 (1789)	四市	四日市のこと。序、跋、漢詩で使用。	『寛政庚戌歳旦集』(1790)
3 (1791)	四水	四日市のこと	『四日市古跡夢扶』(1791)
4 (1792)	四駅	四日市のこと	森正綱『傾蓋漫録』(四日市市立博物館蔵「井島文庫」)
文化 4～5 (1807～08)	泗水	四日市のこと	『改正泗水郷友録』((1807, 08)
文政 11 (1828)	泗水	四日市のこと	「黒澤翁満」(1937)
明治 5 (1872)	泗水義塾開設	四日市のこと。私塾の名称	『近代四日市の幕開け』(1997)
10 (1877)	泗水ノ地タルヤ勢国第一ノ佳港ヲ占メ	四日市のこと。四日市学校補助教員熊沢太郎の祝辞	『納屋小学開校祝辞集』
11 (1878)	泊泗水駅玉川楼阻雨	四日市のこと。青木樹堂の漢詩	『樹堂遺稿』(1887)
12 (1879)	伊勢泗港、泗水胡逸如何	四日市のこと。問題回答者の筆名で、泗港も四日市町の意味	団団珍聞第 131 号
13 (1880)	北勢泗水寓舎	四日市のこと。著者の居住地	『開化算法通書上』(1882)
14 (1881)	泗水	四日市のこと。堀田健次郎の漢詩	『綴英園如欄吟草』
〃	泗水書林宝雲堂	四日市のこと。書肆の店名	上記漢詩集の発行所
18 (1885)	泗水校、泗水ノ地ハ	四日市学校、四日市のこと。校舎新築式典の祝辞	『四日市学校開業一斑』
19 (1886)	泗水商工会	四日市のこと。団体名。八巻道成により設立	『帝国新豪傑美談 (1894)』
〃	泗水〇〇	四日市在住の意味。投稿者の筆名	『大日本全国風雅の友 一名風交の手引き』
20 (1887)	泗水、在泗水 清き泗水に清やかに 進む泗水の賑わいは	四日市在住の意味。 三滝川の流れの意味。長唄 四日市のこと。流行群歌	『於伊勢見八芸八菟九集』1, 2, 3号
22 (1889)	泗水美雨	四日市在住の意味。投稿者の筆名	『千草叢誌』
〃	泗水ヲ過クルモノハ	四日市のこと。	『近世商工業沿革略史附録名家実伝』 伊藤小左衛門の条
23 (1890)	四日市町 一名泗水	四日市のこと	『三重名所図会再版』
26 (1893)	四日市町 (雅客ハ泗水ト称ス)	四日市のこと	『三重県下商工人名録』
〃	泗水堂	四日市のこと。囲碁誌の印刷所名	『五連定石』
28 (1895)	泗水実業革新論	四日市のこと。書名	『泗水実業革新論附餅畝漫録』
30 (1897)	四日市行きを泗水行と云ひて	四日市のこと。下田義天類「史伝愛新覚羅氏」	『田園文学』12号
40 (1907)	泗水菴	四日市在住の意味。記事「伊勢四日市について」の筆者	『風俗画報』455号
大正 2 (1911)	泗港	四日市港のこと	新聞『新愛知』2月2日、10月3日
5 (1916)	泗水俳句会、泗水吟社	四日市のこと。詩歌の結社	『大正三重雅人史』
6 (1917)	泗水	四日市のこと。	『丙辰詩存』服部擔風の漢詩
〃	泗商	四日市商業学校のこと	『柔道』3月号
8 (1919)	泗水建物株式会社	四日市のこと。会社名	『四日市統計要覧』(1923)
9 (1920)	三泗牛馬商組合	三重郡と四日市のこと。団体名	『三重県の畜産』
11 (1922)	泗三請負業組合、泗水焼、泗水病院	三重郡と四日市のこと。団体名、製品名	『三重県肖像録』
13 (1924)	三泗電機商会	三重郡と四日市のこと。会社名	『大日本帝国商工信用録改訂増補 37 版東海之巻』
14 (1925)	三泗労働共済組合	三重郡と四日市のこと。団体名	『日本労働年鑑』(1926)
昭和 10 (1935)	泗水俳句研究会	四日市のこと。詩歌の結社。	『四日市図書館報』82
22 (1947)	三泗百貨店株式会社	三重郡と四日市のこと。会社名	『商工信用録昭和 27 年度版』

表1 四日市の雅称の使用例 出典の刊行年と異なるものは本文の内容で判断しました。これらの多くは国立国会図書館デジタルコレクションで確認できます。なお、上記は資料で確認できたものの一部であり、四日市の雅称の使用例が上記に限られるものではありません。

用いることが多く、四日市港の略語に四つの港と読める四港ではなく、四日市の意味を持つと認知される酒の文字の泗港を使ったと思われる。

大正五（一九一六）年発行の『大正三重雅人史』には、この頃の三重県の文化活動の様子が記されています。それによると、同三年、清水鹿聲が泗水俳句会を興したとあり、この頃の『ホトトギス』にも同会からの投稿がみられます。鹿聲は俳画では水谷百碩や出口對石らを師友としました。その對石は泗水俳句会の同人でもありました。さらに同五年に「桑村のつくれる泗水吟社あり」と、伊藤桑村の結社の名称に泗水が使われていることが記されています。この『大正三重雅人史』は同七年発行の『三重県史』に引き写されています。

大正六年発行の服部擔風（二八六七～一九六四）の『丙辰詩存』には、泗水吟社に赴く途上に詠んだ詩があり、地名として泗水（四日市）と長洲（長島）が出てきます。

同年の『柔道』三月号には、四日市商業柔道大会の記事が掲載され、「泗商にて」とか「泗商」の表記があります。

大正九年、三重県内務部発行の『三重県の畜産』には、三四牛馬商組合の広告が載せられ、それによると、維新前から朝明三重両郡で組織していた組合が、同二年一月に四日市市を加え、名称を三四牛馬商組合と命名したとあります。

大正十一年の『三重県肖像録』には泗三請負業組合の名称が載ります。また泗水焼という製品名や泗水病院が載ります。

大正十二年の『四日市統計要覧』には泗水建物株

式会社の創立が同八年とあります。

大正十三年発行の『大日本帝国商工信用録改訂増補三七版東海之巻』には三四電機商會が載ります。

三四労働共済組合が大正十四年に設立を計画したことが、同十五年発行の『日本労働年鑑』に記されています。

昭和十（一九三五）年の『四日市図書館報八十二』には泗水俳句研究会という結社が掲載されています。

昭和二十二年に三四百貨店（現スーパーサンシ）が創業したことが、『商工信用録昭和二十七年度版』に載ります。

これらから、泗水を四日市の異称とする例は明治時代に盛んになり、さらに泗の一字でも四日市を表し、四日市港を泗港、四日市商業学校を泗商と略称することや、三重郡と四日市市の地域を三四（泗三）と称することが、遅くとも大正時代には行われていたことを確認することができました。

現代においても、四日市市立図書館が昭和五十八年に文化情報誌『泗水』、平成六（一九九四）年に郷土作家研究紀要『泗楽』、翌七年に図書館報『泗泉』の刊行を始めたたり、平成六年に鶴の森公園内に開設された市民茶室が公募により「泗翠庵」と命名されたり、また平成十七年には、四日市市上下水道局が水道水として使っている地下水をペットボトルに詰めて「泗水の里」として発売するなど、しすいの発音や泗水の表記だけでなく、「泗〇」のような泗の文字を使った四日市をイメージさせる名称が使われ続けています。

諏訪神社の孔子像について

諏訪神社に孔子（文宣王）像があったことはすでに述べましたが、これを寄進した原文甫（諱は淵、字を潜玉、号に迪斎や文甫）については、文化四、五（一八〇七～〇八）年頃の成立とされる『改正泗水郷友録』に詩文家、医師、生花、洒落の人として記されている以外、ほとんどわかっていませんでした。

今回の調査に際して、諏訪神社神職の生川鐵忠（二八五三～一九一七）が著わした『蘋藻集』（明治二十六（一八九三）年刊）が国立国会図書館に所蔵されていることがわかり、文甫の事跡が判明する（史料七）とともに、墓碑（図七）の現存も確認できました。

『蘋藻集』は、原文甫（一七八四～一八三七）が寄進した孔子像を祀る講義所（諏訪文庫）の修復と、文甫の五十年祭を挙行（明治二十二年三月）した際の記録として作られたものでした。その序文（史料八）には、原文甫が医業の傍ら、経史百家の書を講じ、諏訪文庫（図八）を創建したこと。そして「文



図7 原文甫の墓（泊山霊園松月庵墓地に現存する）

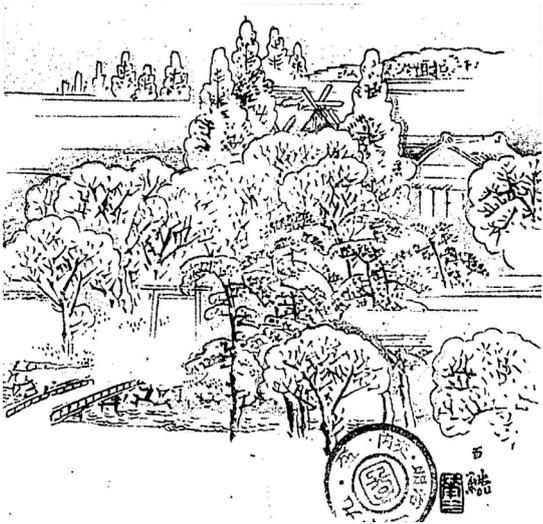


図8 磯部百麟が描く諏訪文庫。諏訪神社境内にある山津見神社の隣に描かれている。『蘋藻集』口絵。国立国会図書館デジタルコレクションより

宣王像与所講「經史百家之書」今猶存焉（文宣王像と經史百家の書を講ずる所今なお存せり）翁逝五十年有「其跡無其人」（翁逝きて五十年、その跡ありて、その人なし）（訓点は筆者）。と記されています。孔子像については、三重県神社庁所蔵の「神社宝物古文書目録」（明治十二年）の諏訪神社の条に、他の宝物とともに、

一 孔子像 一体

一 孔夫子像 一体

天保三年三月四日 原文甫寄附
と記され、同様の「第一種古社調書四日市ノ分」（明治二十九年、三重県神社庁所蔵）には、

一文宣王像 壹体

唐木作者不詳

一同厨子

唐木寄木細工庄五郎作ト伝フ

右天保三年三月原文甫奉納

と記されています。これらの史料から諏訪文庫の創

建は天保三（一八三二）年とみてよいでしょう。明治二十二年の五十七年前のことです。原文甫が亡くなったのが天保八年ですから、文甫は諏訪文庫を創建した後も、文庫で經史百家の書を講じていたと思われる。

菊池五山の撰になる墓碑銘（史料七）には「距今三十六年、君な弱齡にして余につき詩を学ぶ」（訓点は筆者）とあり、五十四歳で亡くなった文甫が十八歳の頃に詩を学び始めたことが記されています。これは四日市が郡山藩領から幕府直轄地になった直後に当たります。

想像を逞しくすれば、孔子像は四日市が郡山藩領だった頃は藩の役所か儒者の家に祀られており、幕府直轄地となつてからは、像を四日市に残してもらったうえで、原文甫が医業の傍ら經史百家の書を講じていたが、文甫が高齢になつたため、諏訪神社境内に孔子像を祀る文庫を創建したのではないでしょう。

四日市が寛政年間前後に学芸が大いに盛んになったのは、郡山藩領であったことが影響していることは間違いなく、幕府直轄地となつた後の学芸的気風は、原文甫を始めとする四日市の町人の力で維持継続されたと思われます。しかし明治の半ばに至り、そうした学芸的気風も失われてしまい、生川鐵忠が諏訪神社の神職となつてから、文甫の事跡、四日市の学芸的気風を引継ぐため諏訪文庫の復興を企図したのではないのでしょうか（資料九）。

生川鐵忠もまた、若くして和漢の書に親しみ、神宮教院（現皇學館大学）の塾頭を勤めたのち、諏訪

神社宮司となると神職の合間に歴史の考証や和漢の詩を詠んだようです。昭和五年版市史には、自詠の和歌漢詩集も少なくなつたが明治三十年の火災で失われたとあります。⁴²この火災で諏訪文庫が燃えたのかどうかは不明ですが、孔子像に限れば昭和五年版市史に写真が載ることからも、無事だったようです。

四つの井戸の説

四つの井戸があつたとする説は、管見では明治四十（一九〇七）年発行の『四日市志 附名所案内』⁴³（以下『四日市志』という）で初めてみられます。泗水：四日市を、また泗水といふことあり。是れ当地開拓の初に当りて、人の飲用に供すべき井四つありたれば、かくいふなりとぞ。而して、四つの井とは、清水本陣、飯田、建福寺、及び辻の惣井是れなり。又、一説に、徳川氏の代、漢文学の隆盛を極めたる時に方りて、何事も、支那風と呼ぶこと、一時の流行となりしかば我が四日市をも、かく支那風と呼びなしたるなりといふ。

因に云ふ、飯田の井水を用ひて、神酒を造り、（初めは清水本陣の井水をも用ひたりしが何時頃よりか、飯田の井水のみを用ふるに至れり）毎年九月二十五日、諏訪神社より、氏子一統に分配するを例とす。こは享保明和以前よりの慣例なること記録に明らかなり。

昭和五年版市史にも泗水のいわれの記述がありま

す。⁴⁴

(前略) 大字四日市は雅名を泗水の里と称す。其の起源は左記四ヶ所の井あるに基くと伝へられてゐる。

南町飯田勘之助方裏の井

建福寺壺の内の井

北町辻加藤時計店裏の井

豎町森太薬店前にあつた井

右の内森太薬店前にあつた井は街路交通の妨となつたので明治十七年頃埋めたといふ。

北町辻の加藤時計店は清水本陣の場所にあたるので、裏の井戸が『四日市志』にいう清水本陣の井戸となり、辻の惣井は豎町森太薬店前の井戸ということになります。この辻の惣井が明治十七年頃に埋められたことについて、『四日市志』は一切触れていない点は若干疑問が残ります。

『四日市志』に記された当地開拓の初めに人の飲用に用いられた四つの井戸の説ですが、もしそれが事実とすれば、江戸時代の早い時期に泗水の表記が使われていても良さそうなものです。ところが、寛永二十(一六四三)年に林羅山が東海道を旅した折の紀行文『癸未紀行』には「四日市場」と表記され、寛文七(一六六七)年の松井可楽の『東行日記』には「四日市」と表記されています。それ以降の旅日記を見ても「四日市」以外の表記を見つけることは難しいのです。

辻の惣井を埋めた時期を明治十七年頃とすると、それから『四日市志』が発行されるまでの間に、四つの井戸説が生まれたと考えることができます。明

治十年代以降、泗水の使用例が増え続けて、認知度が高まったことから、その由来となるものが必要とされたのではないかと思ひます。

また、「泗水の里」の表記は、この昭和五年版市史が初出のようです。これまでなかった「泗水の里」が表れたのは、頼山陽(一七八〇〜一八三二)が文化十(一八一三)年に四日市を訪れた際、ここを「泗水の里」と詩に詠んだという地元の話に由来するようです。その話は、昭和三十五(一九六〇)年当時、四つの井戸のうち唯一現存する建福寺の井戸を四日市の文化財(記念物)に指定する際の記録に残っており、当時の担当者がその話を確認するため、山陽の詩を探したものの見つからなかったとも記されています。⁴⁵ 頼山陽が文化十年、三十四歳の時に四日市を訪れたのは事実ですが、四日市を詠んだものは管見では史料十の詩のほかは見当たりません。もし、この「泗水の里」を詠んだ詩が存在すれば、「泗水の里」の最古の例となります。

なお、昭和三十六年発行の四日市市史には、幕末頃に文人墨客によって盛んに泗水の表記が用いられたと記し、昭和五年版市史と同様、江戸時代初期に遡るような記述は見られません。しかし、その由来は昭和五年版市史と同様、四つの井戸説を採用しています。少し異なるのは、南町の飯田勘之助方裏の井戸が当時の所有者と思われる黒川信章方裏の井戸に変わり、北町辻の井戸が元加藤時計店裏の井戸と記されているところと、四つの井戸の内、現存するのは建福寺の壺の内の井戸のみと記されているところです。昭和五年から三十年余りの間に、さらに二つの井戸が無くなっているのです。

泗水の里はともかく、泗水が四つの井戸に由来するという説は、残された史料や使用例として確認された年代、そしてその井戸に対する評価の低さからみても信じがたいといえるでしょう。

おわりに

これまでみてきたように、泗水という言葉は、文芸的な雅称として四日市を表したものであり、特に由来のあるものではありません。強いてあるとすれば、郡山藩領時代に培われた四日市町の人々の学芸的気運が十八世紀末から十九世紀前期(主に寛政年間前後)に大いに隆盛したことが底流にあるといえます。

四日市の中心に四つの井戸があつたという説はこうした学芸的な素養を修めた人々の時代が過ぎ去り、迷信や旧弊を改める文明開化の時代に、近代的な教育を受けた人々の、何にでも科学的な根拠を求めようとする要請に応えた牽強附会、つまりは故事付けたったといわざるを得ないでしょう。今後は、そのような伝承が生まれた背景について考えていく必要があるでしょう。

今回の考察を通じて、図らずも四日市の学芸的雰囲気の変遷を知ることができました。最近は聞かれなくなりましたが、「四日市は文化不毛の地」という表現が昭和時代の後期から平成の中頃まで使われていました。その理由を四日市には歴史を感じさせないものがないとか、産業優先の町だからと語る人もいました。しかしそれらは、歴史的な事実を背

け、目の前にあるものだけを評価して理解したと考
える短絡的な見方にあるのは言うまでもありません。
もし諏訪文庫が残っていたら、あるいは空襲に
遭っていなければ、そうした認識も変わっていたか
もしれません。

市立博物館は平成五（一九九三）年の発足以来、
多くの市民の皆様のご理解とご協力の下、この地域
の貴重な資料を数多く收藏してまいりました。これ
ら資料は、四日市が文化不毛の地ではないというこ
とを静かに、しかし力強く物語っています。

四日市の市民や四日市を愛する人々の学芸的気風
を下支え（現代風にいうと学術、教育、文化の発展
に寄与）するために、市立博物館はこれからもこの
地域に関する貴重な資料を收藏し、後世に確実に継
承するとともに、資料の持つ価値を丁寧に発信して
いける存在でありたいと考えています。

ひろせ たけし（学芸員 副館長）

後註

- 1 一六〇三年に刊行された『日葡辞書』には「儒道」と
「儒者」のみが掲載され、儒学、儒教、泗水、泗上、洙泗の
言葉は載らない。（『邦訳日葡辞書』一九八〇、岩波書店）
- 2 洙泗とも。泗水と洙水は共に、孔子の故郷、郷邑を流
れる川。転じて孔子の学、儒学。
- 3 泗水のほとりの意味。孔子が泗上で教育に当たったか
らという。孔子の門人を泗上の弟子という。
- 4 泗水は熊本県菊池市の旧泗水町の他に、足利学校のあ
る栃木県足利市を流れる渡良瀬川を泗水と呼ぶほか、イン
ドネシアのスラバヤの漢字表記が泗水など、四日市に特有
のものではない。国内で泗水が使われている所、はいずれ

も儒学や孔子に由来（洒落も含めて）している。

5 三重県は一般的に県内を北勢、中勢、南勢、伊賀、東
紀州の五地域に分けている。このうち北勢では桑員、三泗、
鈴亀のように、郡市町名などで分けて呼んでいる。

6 現在の四日市市中部一八・五付近。四日市旧港へ続く
豎町通りと東海道が交わる場所。江戸時代に高札場があっ
たことが名の由来。

7 『四日市市史』五三三頁、一九三〇、四日市市教育会

8 この随筆は幕末頃にまとめられた『燕石十種』にも採
録されるなど、それなりに流布したと思われるが、大正九
年発行の『新従吾所好第二編完本独寝』には燕石十種に載
るものは西村馬曹蔵本系の残欠本であると記す。写本とし
て残る物の多くも燕石十種本系統である。岡田甫著『奇書』
（一九六四年刊）九三頁に「なお『独寝』のほんとうの意味
での完本は、大和郡山市在住の水木直箭氏の校訂で、近世
庶民文化研究所から最近上梓されている。」と記し、現在、
国立国会図書館デジタルコレクション（「ひとりね」で登録）
で読むことができる。

9 寛政二（一七九〇）年刊。江戸時代の人物百人余の伝
記を五巻にまとめる。掲載の人物は隠士、文人、町人、農
民に及ぶ。なお、続編として三熊花顔が著した『続近世畸
人伝巻二』（寛政十（一七九八）年刊）には伊勢国三重郡松
本村の古谷久語が掲載されている。

10 成立年未詳。太田南畝の寛政七年の題言が載る。『日本
随筆大成第二期第十二巻』七二二頁、一九二九、日本随筆
大成刊行会

11 馬曹の師の美樹とは歌人・国学者の加藤宇万伎
（二七二～七七）のこと。

12 四日市宿（問屋場）の役人（駅長）で庄右衛門とも書く。
寛政九（一七九七）年刊の『東海道名所図会』四日市の条

にある寛政七年五月作の「那古浦蟹楼記」という四百十一
文字に及ぶ漢文は、名所図会の編著者秋里籬島に頼まれて
馬曹が記したもの。また享和元（一八〇一）年に太田南畝
が大坂への旅の途中、四日市に立ち寄った際、馬曹が昨年
秋に亡くなったと聞き、「長亭短亭生死路、東去西去馬蹄塵、
光陰百代為過客、天地誰非逆旅人」という詩を作っている。
（『改元紀行』）

13 国立国会図書館に收藏される『独寝（ひとりね）』の写
本は三本（一つは燕石十種の写本）確認できるが、いずれ
も燕石十種本系。

14 新従吾所好第二編『独寝』二四二頁、一九二〇、従吾
所好社

15 『老伴集』は西村馬曹の父母の長寿を祝った歌集で、寛
政元（一七八九）年の刊行。序は城戸月庵が天明八年に記す。

16 『四日市市史』四九二頁、一九三〇、四日市市教育会

17 『東帰稿刪』の月庵の自叙には、同郷（三重郡日野村）
の後藤重栄（木卿）が出版費用の助力を申し出たとある。
弟杉山重水が記す跋には、当初の助力は実現しなかったが、
月庵没後に義兄後藤木卿の力があつたことを記す。

18 龍草廬（諱は公美）は京都伏見の人で漢詩人、儒学者。
本名は龍見だが中国風に龍と称した。一時、近江彦根藩儒
を勤めた。

19 『四日市市史』四九二～四九四頁所収、一九三〇、四日
市市教育会

20 『四日市市史第十巻史料編近世Ⅲ』九一三～九三九頁所
収、一九九六、四日市市

21 『四日市市史論集第五巻第一号』（一九九二）及び第六
巻第一号（一九九三）いずれも四日市市大学学会。また第四
巻第二号（一九九二）の「小林家の『書物目録』」の中で、『東
海道人物志』に載る四日市の文化人を紹介している。また、

四日市が文化不毛の地といわれることについても、これら史料をもとに、少なくとも江戸時代、東海道の宿場町の中ではひととき文化人が多いと述べている。

22 『四日市大学論集第五卷第一号』(一九九二)

23 『続近世崎人伝巻二』(寛政十(一七九八)年刊)には、一度読んだ本は記憶して忘れなかったといわれ、後には伊勢国中の地理や歴史、産物などを布留屋草紙に著した。君侯から古谷の名字を賜ったと記される。

24 『四日市市史第十巻史料編近世Ⅲ』八七五〜八七九頁所収、一九九六、四日市市、『泗水』No.3、1985、四日市市立図書館

25 渡辺刀水(一八七四〜一九六五)は帝国陸軍中将で、退役後に人物研究者として活躍。刀水が収集した幕末〜明治の著名人の書簡約八千五百点は、現在東京都立中央図書館に所蔵されている。

26 埼玉図書館叢書第三編 渡辺刀水著『郷土の偉人研究(一)』六五頁、一九三七、埼玉県立埼玉図書館

27 黒澤翁満(一七九五〜一八五九)は桑名(のち忍)藩士。国学者、歌人で戯作も書いた。山東京伝が黒澤翁満に出した手紙が、現在東京都立中央図書館に残る。京伝が執筆した『骨董集』(一八一四、一五年刊)の中にも、翁満が描いた伊勢桑名の姫瓜の節句と髪葛子の節句に関する絵が載る。

28 『四日市市史第十巻史料編近世Ⅲ』六九三〜七〇九頁、一九九六、四日市市。人名とみられるのは少なくとも三十九人で、そのうち「寛政泗水郷友録」と重なる人は十五人確認できる。

29 森正綱(字は藤次、号は子紀)は三重郡下村(現三重郡菟野町下村)の人で、四日市の伊達茂伴(のち氏伴)とも交渉があった。「夏日林居」と「秋夜聞雨」の漢詩が伝わる。

30 『四日市市史第十巻史料編近世Ⅲ』、七九〇〜七九七頁

所収。傾蓋とは、孔子が道で偶然出会った程子と、車を停めて車蓋を傾け終日語り合った故事にちなむ言葉。

31 木村兼葭堂は文人、画家、収集家、本草家など多芸多才の人で、家業は造り酒屋。寛政二年、酒造高超過の罪で町年寄役を罷免され、長嶋藩主増山雪斎を頼り家名再興を期す。四年後、大坂に戻り文具商を

32 井島家は四日市町の庄屋役を伊達家と共に勤める家柄。江戸時代の古文書は四日市市指定文化財「井島文庫」として現在四日市市立博物館に所蔵される。この「傾蓋漫録」は森正綱の自筆本のみ。柳沢淇園の絵が井島の隠居から正綱へ伝わり、「傾蓋漫録」は正綱から井島家へと伝わったことから両者の間柄を窺い知ることができる。

33 『近代四日市の幕開け』三五頁、一九九七、四日市市立博物館

34 大賀旭川の私塾半学舎は撥英園半学舎とも言った。

35 明治十四年十月、泗水書林宝雲堂発行

36 明治十年八月に発行した『通常物問答 全』では書肆名が泗水宝雲堂となっている。このことから泗水書林は四日市の書肆という意味で使ったと思われる。

37 泗水美海は二〇一八年二月の全日本選抜競輪のポスターに描かれたキャラクターで、バーチャルユーチューバーとして二〇一九年四月から活動している。(四日市市ホームページ 市長定例記者会見平成三十一年四月二十三日要旨)

38 神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」参照

39 大正六年三月号、柔道会本部

40 明治二十六年発行、生川鍊忠著。明治二十二年三月の序文がある。

41 菊池五山(諱は桐孫、字を無絃、通称に左太夫、号は五山や娛庵、一七六九〜一八四九)は讃岐高松藩の儒官の

家に生まれ、若くして昌平黌の柴野栗山に学ぶ。寛政十二年「自造の罪」によって江戸を離れ、数年間関西に滞在する。文化二年までの間、四日市伊達家に寄寓するなどの支援を受けた。作家で文藝春秋社を創立した菊池寛は五山の傍系の子孫。

42 『四日市市史』六九六頁、一九三〇、四日市市教育会。三重県神社庁所蔵の『神社宝物古文書目録』(一八七九)は、明治三十年三月廿三日の火災で焼失した宝物を六月十五日付で目録から抹消している。

43 著者兼発行人伊藤善太郎

44 『四日市市史』二二四頁、一九三〇、四日市市教育会

45 四日市市シテプロモーション部文化課石毛彩子学芸員からご教示いただいた。

参考文献
『四日市志』伊藤善太郎、一九〇七
『四日市市史』四日市市教育会、一九三〇
『四日市市史』四日市市、一九六一
『四日市市史』第十巻史料編近世Ⅲ 四日市市、一九九六
『四日市市史』第十七巻通史編近世Ⅲ 四日市市、一九九七
『近代四日市の幕開け』四日市市立博物館、一九九七
『大和郡山市史 本編』大和郡山市、一九六六
『日本古典文学大辞典』岩波書店、一九八四

参考ホームページ
国立国会図書館デジタルコレクション
国文学研究資料館国書データベース
神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」
早稲田大学図書館古典籍総合データベース

史料編

訓点や豎点は掲載書の通りに翻刻、但し（ ）内や傍線は筆者

男 重敬 書 (龍玉淵 草廬の子)

「龍淵」「貞美氏」

史料一 『東帰稿刪』(国文学研究資料館蔵)

(表紙題箋)

東帰稿刪 完

(表紙裏)

城戸芙蓉先生著

東帰稿刪

平安書肆 玉樹堂発行

東帰詩刪叙

魯論夫子有云知之者不若好之者好之者不若樂之者愚妄加一言曰樂之者不若忘之者夫好之固可也而樂之者大矣未若忘之者忘之者与之化也郡山城戸生示東帰詩刪且求題言首簡夫草廬氏當時俊也読其泗水行評之寔顯行本色白香山惟処不啻也此非樂之而安得此惟称乎余熟談此集近体律絶刻意滄溟氏高華典麗得其一作者也世嘗著詩話有言善学于鱗不背于鱗不背于鱗者忘之者也忘之者思探溟海不墜魔境今也城戸生為京邸吏司時来互陽春社盟夫好之樂之者君既已能之請自今学忘之者邪因題数言期其余美云

天明壬寅秋八月

丹邱 芥煥 撰 (芥川丹邱)

「芥煥之印」「彦章」

東帰稿刪

郡藩

城戸賢公賢父著

辛丑之秋予浴温泉於但馬之時夢東帰故園途謁龍先生於緑鴨川上歴江到勢来往其間前後長短巴調數十首為編焉嗚乎奇哉予詩則鄭人之鹿歟若夫蔵之隍中則無勞士師之夢然有忘所蔵之处則不可知也幸有同郡後藤重栄字木卿者請出其橐裝助費上木遂趣命工云尔

留別保坂子文

鳳樓簷近古皇州緑酒如河送客遊砧杵丁東陰雨夜関山迢遞白榆秋鏡中已見潘郎髻囊裡元無季子裘揺落為無生遠別三更醉臥未堪愁

重留別子文分韻

秋夕悲秋臨路岐客中為客淚堪垂不知明日登高会多少菜莢挿向誰

留別山名士獻

秋色無遠近肅肅滿乾坤長風吹連雁孤日照哀猿翰也思鱸欲東帰鹿裘不輕馬不肥故人臨別開尊送未醉元非酒力微

留別柳大夫

肅、颯、秋、風、驚、客、魂、離、亭、寵、送、有、芳、尊、屈、蘭、秀、日、辭、山、郭、陶、菊、開、辰、到、故、園、處、處、親、朋、逢、復、別、時、時、好、景、亡、將、存、縱、令、心、緒、逾、搖、落、豈、負、平、生、國、士、恩

白井士迪書以見惠美酒誹句賦謝無留贈

秋、晚、鴻、書、至、卷、舒、意、轉、親、芳、尊、堪、醉、客、俊、句、見、驚、人、獨、酌、愁、猶、散、孤、吟、興、自、新、酌、顏、臨、別、路、不、用、杖、頭、緝

艸堂雨集各賦別限体及韻

艸、堂、秋、雨、夕、暫、時、一、尊、同、分、手、金、峯、北、回、首、錫、岳、東、故、人、如、相、憶、尺、書、附、飛、鴻

席上呈艸廬先生

歸、隱、幾、年、鳧、水、陰、窓、前、唯、見、有、書、琴、下、風、侍、去、人、心、羨、今、日、親、聞、咳、唾、音

先生有和答日郡山城戸生始過鳧水漁舍席上有詩見贈

第、三、橋、畔、五、楊、陰、避、世、閑、彈、膝、上、琴、相、值、莫、言、相、值、晚、新、知、音、是、旧、知、音

再用前韻留別先生

門、柳、秋、深、未、減、陰、縮、來、併、贈、一、張、琴、故、園、他、日、思、君、鼓、曲、裏、誰、知、鳧、水、音

登三井寺大悲閣

大、悲、高、閣、瑞、光、呈、湖、水、茫、茫、映、彩、楹、寶、鐸、偏、含、山、雨、響、帆、舟、遙、掛、夕、陽、明、臥、龍、橋、架、千、尋、許、神、女、洲、迷、百、里、程、借、問、古、鐘、何、處、在、上、方、攀、去、苦、崢、嶸

題石山寺

徑、曲、山、門、樹、裏、開、峻、嶂、香、閣、倚、崔、嵬、風、光、不、必、清、秋、月、湖、上、夕、陽、觀、壯、哉

秋月旅懷

一、身、辭、鄉、國、孤、月、幾、缺、盈、朔、風、入、秋、樹、搖、動、懷、土、情、山、駭、曉、窓、暗、江、闕、暮、天、晴、前、村、誰、家、婦、頻、送、砧、杵、聲、嘆、息、無、衣、客、履、霜、事、孤、征、昨、夜、旅、館、裡、夢、結、三、四、更、阿、母、喜、我、至、呼、我、見、弟、兄、已、賜、以、家、醞、猶、恨、無、鱸、羹、條、忽、春、復、夏、暑、往、寒、風、生、海、岸、雪、月、夕、下、船、獨、吟、行、竹、裡、有、茅、屋、幽、棲、旧、同、盟、敲、冰、盛、茗、椀、論、詩、解、宿、醒、客、夢、是、何、物、終、為、夜、猿、驚、長、道、行、不、尺、川、原、或、巖、阮、倚、劍、涉、香、渺、仗、策、苦、崢、嶸、周、流、東、西、海、經、歷、南、北、京、誰、憐、征、路、子、不、異、木、葉、輕

還泗水遇弟政常書感

中、原、元、闊、達、孤、客、獨、周、流、旅、食、伝、何、日、征、衣、換、幾、州、東、行、臨、水、岸、西、別、上、林、丘、已、聽、湘、妃、瑟、復、憑、紫、女、樓、清、音、侵、兩、耳、好、景、逼、双、眸、衰、鬢、悲、風、暮、歸、心、明、月、秋、相、逢、詩、遣、興、對、酌、酒、鎖、愁、更、覺、江、山、勝、不、如、故、國、遊

同政常賦得麻韻

頻思鱸膾復還家，豈愧身無畫錦誇。堪愛白雲飄尺丈，
在山名偏憐碧水撼琵琶。囊中不少驚人賦，筆上真生入夢
華。唱和猶愁秋夜短，任他浦樹起晨鴉。

同政常過菰山艸堂

雨晴西風起，携手何處之。菰山有茅屋，慈母此棲遲。沒徑蘭無
菊對籬，山與陂行行歌未闕。忽爾到階墀，彩服線不斷。双双偏
兒嬉，樽前多清興。終日飽恩慈，唯恐來夕月復照。別恨眉

又分韻

長堤尽，處有山莊。兄弟相逢，酒觴冠岳色。於雲裡，嶮蓬洲。
望自樹間，長心寬坐見人顏。鮮歡極，逾任客態狂。須服
彩衣，同醉舞。嫣然慈母在，萱堂。

秋日集友于亭分韻

海上雨晴秋，氣高華亭相。值興何豪階，庭蘭秀媚甜。酒籬
落菊開，映把蟄翠幄。晚風催坐嘯，紅氈斜日好揮毫。不辭入
夜如泥醉，人世歡娛屬我曹。

上墓

泗水光運寺中有父祖及子弟之墓

流水去不還，白駒過何疾。疇昔如今朝，已遠復苦日。王父擁
子孫，列墳似在家。我來訟中心，泣哭声欲失。苔碑終不言，
嗚呼有誰恤。

過香譽上人隱居席上賦呈

穢土自甘名利輕，柴門常閉縱閑情。深林帶寺聞僧語，幽
徑連津見客行。東海雲追香雨散，西山月照法蓮明。知
君底得無量壽，趺坐已隣蓬瀛。

泗水賦長西邨馬曹喪子賦以慰

馭道風高樹未殘，階庭何事敗芝蘭。九重泉涸秋心寂，一片
烟消歲易闌。架上故衣空信掛，頭邊余葉不堪看。可憐夜夜
金閨燭，紅淚徒追玉筋寒。

偶逢重陽有感

重九遙歸勢，海隈東籬苔滑。一尊開興，情暫擬陶潛。趣詞賦
或同宋玉哀，冷露朝侵黃菊。落飛鴻夕傍白雲，來偏憐鄉國。
良辰色已映，故人送客杯。

政常宅集十一覃

秋雲天暗泗橋南，此夕相逢商與參。清興酒尊猶瑣瑣，玄言塵尾
自毵毵。雙毫落紙凌張旭，青帙滿案推老聃。車轄投來情轉
好，壯遊須信主人貧。

九月十三日後藤木卿訪菰山艸堂分韻得支

突兀冠峯雲霧披，衣裝顛倒迓君時。牛羊朝跋蓬蒿徑，蟋蟀
吟松菊籬堂。上有遊雜佃客尊，前無興舞吳姬。晚來須沽隣
村酒，各自唯歌明月詩。

九月十三夜菰山艸堂小集分韻

共憐山月自輝光，各有明珠照艸堂。揮筆豈空今夜興，開尊須發昔時狂。殘花霜落籬邊菊，老葉風吹畝上桑。問婦娥何不，去應言座客異尋常。

達氏宅阮月分韻

霜滿中庭月滿山，山寒何信正躋攀。行雲一片暫時去，應是嫦娥梳曉鬢。

秋日同木卿登菰山得尤韻

山南山北尺閑幽，詞客相携此壯遊。各處危橋懸樹杪，幾多崩石激溪流。天宮似駕王喬鶴，海岸遙窺范蠡舟。為愛斜陽照霜葉，登臨更倚白雲樓。

菰山歌

丹青之野，帶田丘。田丘西南溪，水流怪石水激，聲鳴咽。知是三重長川，名喉雙崕，喬松終不催枝臨石梁，留晴雷徑通深山。與幽谷屏嶂何年，五丁開石筍，萬仞懸危巖。山骨露出倚雲邊，冠岳高頂坐一岳，岫攀去自在摩挲天。天宮近處有人家家，家樓閣擁彩霞，梯下常吐如湯水，驪山不及山人誇。千古石裂墜澗底，大石石名信大樹如薺谷，風捲浪生盤渦奔流。日夜逐仙醴，瀑布直下億方尺，水從蒼穹青或碧，蒼穹青或碧，青濁故云。詩景自在紫烟中，山神不恨少太白三株老杉，有老杉三株道不難。菰山之勝道，險阻看，盡勢張海色，寒名山如，此堪棲託。

自笑年年羈人官

政常宅題九霞山人画王衍清談圖。寧馨兒對白頭翁，默然何時言不空。休笑新詩點新画，古人已比古人中。

泗水行

龍先生有叙曰：古曰知之者不如好之者，好之者不如樂之者。知好樂之益其大矣哉！郡山城戶生之於詩也，其庶幾乎是。故雄篇大作，日新富有以樂焉耳矣。生者伊勢人也，官暇歸鄉之便，道來而敲鳧川之居而束脩以取弟子之禮，其謹厚之資大堪可敬焉也。行李之中有泗水行一篇，出以請準繩於公。美即采而覽焉，則寔歌行之本，色白香山之佳，處不啻也哉。乃知而好好而樂者之所為哉！即斯言以品於泗水行云。

天明紀元辛丑秋 伏水龍公美撰 (伏見龍草廬)

憶昔

神祖猶微，年此地營館，能樂天新發，妙策詘英傑，獨愛蒼生。日乾坤一朝龍飛，比豐沛殊薄，稅斂百余載，西有長橋望遠山，東有長堤臨大海，遠山大海月出時，橋頭徘徊遊冶兒，忽邀美女過酒肆，花間弄月醉金卮，大海秋風晚來波，長堤清亮，發漁歌，漁舟借問幾千百，白鷗群處網魚多，千家總富，食有魚不，求自飽，自安居士女風流耽，歡樂却笑王門曳長裾，吾侯移封賜此地，寬政仍不征市街中倉廩滿，那空真是都，會人稱美，七月二十六七日，神祠賽會誰能筆，韓客行裝，伶人遊錦繡，製衣三万匹，寶蓋大車，龍頭船飾以金。

玉明且鮮百靈群·鬼次·第出步スル·兮遲遲ニシテ·斷復連鼓·鼙雷ノ如·鳴丈
夫驚彩·鷓閃·閃·紅·白·旌指·揮·長·戟·頻來·去·已刺·巨·鯨·拜·天
行中·元之夜競·躍舞·公·館護·來部·与·伍舞·者最艷·觀·者妖·繁·絃急
管雜·鐘·鼓·冬·夏·好·景凌·春·秋·冠·岳積·雪重·水流·雪照·人·顏·水
可·浴·千·歲·行·樂終·不休

選·近·旧·情·妓·代·作

閨·裡·曾·嗟·生·別·離·春·風·秋·月·幾·回·移·莫·言·媚·婦·元·輕·薄·記·得·柳·
邊·攜·手·時

用·前·韻·留·贈

一·脱·鴛·衾·為·客·時·楚·雲·湘·水·幾·遷·移·誰·知·今·日·桑·間·會·更·是·生·
涯·遠·別·離

還·鄉·歌

君·不·見·暮·潮·去·兮·早·潮·來·人·出·門·月·知·幾·回·家·人·早·起·趨·相·送·杳·
冥·峯·下·水·城·限·暫·時·握·手·更·牽·裾·揮·淚·唯·責·那·遺·余·多·少·友·朋·情·
不·淺·各·言·別·後·數·寄·書·有·兒·女·自·眠·自·食·猶·未·得·離·筵·端·坐·乳·
母·側·驚·見·征·衣·異·常·衣·涕·淚·在·眼·顏·色·惻·辭·去·忽·到·見·水·陰·相·
逢·龍·子·本·陸·沉·与·吾·同·志·復·同·調·賦·詩·一·稱·旧·知·音·泗·水·有·
弟·字·子·友·今·春·親·迎·閑·雅·婦·下·堂·俱·邀·且·開·尊·尊·前·貴·客·姑·与·舅·
敲·門·訪·來·旧·同·袍·德·卿·木·卿·西·馬·曹·生·川·子·英·瀨·婦·樸·鯨·飲·
千·斛·發·興·豪·詞·賦·如·涌·堪·驚·人·何·啻·驚·人·妙·人·神·誰·道·
新·友·如·旧·友·旧·友·新·藻·尽·奇·新·慈·母·慈·母·脫·塵·園·終·日·閑·閑·
在·菰·山·門·前·忽·聞·履·聲·至·殘·機·不·斷·唯·懼·顏·游·子·身·上·曾·

賜·衣·縫·時·意·恐·遲·遲·歸·歸·來·傷·心·再·別·逼·今·日·何·恨·馬·
不·肥·田·達·兩·妹·有·女·弟·人·殊·健·在·以·時·歸·寧·更·服·彩·皆·言·一·
自·緝·柳·楊·不·見·吾·兄·意·如·餒·昨·遊·山·下·今·海·傍·處·處·罄·歡·
歡·不·忘·妻·兮·孥·兮·今·心·待·不·知·何·處·是·異·鄉

謝·松·原·先·生·賜·尊·酒賢·幼·子·時·為·
二·先·生·之·塾·生

歲·歲·寂·寥·楊·子·門·玄·經·艸·罷·絕·塵·煩·問·奇·千·里·遙·歸·去·何·事·
却·能·投·一·樽

重·陽·再·留·別·故·園·諸·子·分·韻

佳·節·相·逢·對·濁·醪·如·今·總·是·旧·同·袍·風·前·帽·落·龍·山·孟·霜·下·花·
開·彭·沢·陶·清·和·只·須·不·移·座·壯·遊·何·必·更·登·高·請·君·休·訝·
難·離·別·千·里·曾·徵·夢·寢·勞

留·別·連·城·山·人

惜·別·未·領·離·別·杯·茅·廬·一·去·幾·時·回·山·人·他·日·如·相·憶·多·少·
白·雲·持·贈·來

秋·夜·飲·飲·仙·堂·分·韻

酒·滿·清·尊·似·海·潮·飲·中·仙·客·氣·逾·驕·老·來·何·羨·宗·之·面·醉·
後·俱·裁·子·美·謠·孤·月·滿·輪·斯·夜·色·千·金·一·刻·豈·春·宵·壯·遊·每·
恨·隣·鷄·報·況·復·明·朝·別·路·遙

諸·子·詩·各·成·而·見·贈·率·爾·賦·謝

隨·意·高·堂·曙·色·開·杯·盤·狼·藉·壯·遊·哉·百·篇·詩·就·何·須·怪·總·

是飲中一斗下

秋晚到邸諸君見過分韻

飄飄遊子涉風塵，楚水吳山來去頻。舟裏算程月，明夜帽前搜景菊。花辰鳳樓一別黃金尺，公館再還白髮新。何幸眼中人悉在，案頭仍舊意相親。

山名士獻有九日偶成之詩予自鄉到則見贈次韻以謝

昨來門柳自依依，偏拈離筵懸落暉。彭沢興緣千里去，龍山遊說寸心違。霜威凜冽書兼劍，風包蕭條帽與衣。交態如君誰又有，滿囊詩賦待人歸。

有所思行贈木卿

寢亦有所思，寢亦有所思。美兮彼一人，在東海之西。天涯海寒白波起，百川朝宗漾冰澌。曾知赤螭游泳黑蛟蟠，長鯨噴湧可涉難。又知海涯路千里，荊棘埋谷山鬱盤。虎豹橫道猛氣振，嚙狐狸不飽欲攫人。我無飛翰與縮地之奇術，空思美人魂苦辛，苦辛不可言。涕淚万双如傾盆，何日能有長風至，吹此涕淚灑君門。

和木卿寄懷作

泗水悠悠緋野阜，名木卿交情來往不辭勞。名山携手新詩健，佳節歡顏發興豪。一別空望前浦雁多愁，頻酌古都醪窮陰閱曆陽春近，白雪堪期曲裏高。

賡故園諸君夜集馬曹宅寄懷韻五首

聞說詞人敲竹扉，月前尊酒酌清輝。誰憐他席情偏切，獨羨故園遊不違。夜夜愁緣留客舍，時時興為近仙闈。泗水隣故園寄來新藻殊飄逸，知爾下名冠九畿。

右馬曹

去馬嘶時霜月寒，放歌纔尽一宵歡。寧知別後唯耽酒，為報愁來更倚欄。江上尺書勞北雁，城中孤客泣南冠。風塵幾歲紅顏改，何耐聚星天末看。

右木卿

客裡山城歲月催，肅然酌辟寒杯。梅花詩憶遊人，就松墨字隨孤雁來。鼓瑟已誇曾點興，登樓深愧仲宣下。三澗橋上烟霞好，風詠何春携手回。

右光本德卿

一年還歷一年秋，徒羨幽中興更幽。迎客山城風色古，揮毫江海月光浮。黃金散尽吾多感，綠酒斟時爾壯遊。千里自從書信至，夢魂同上故園樓。

右生川子英

獨对他鄉月，遙知夜宴闌。書來留案上，詩就動毫端。常守愚兼拙，末愁飢與寒。何當歸故國，却話旧時歡。

右福井政章

冬日喜政常至

春·光·何·日·對·浮·漸·庭·竹·偏·臨·鷹·塚·池名在本藩艸堂所也·霜·滿·山·城·懸·
片·月·風·吹·野·墅·起·寒·鷗·年·年·為·客·身·多·病·夜·夜·思·親·髮·欲·聯·
灯·下·喜·逢·疑·是·夢·遽·呼·乳·母·見·孩·兒是政常之所也生也賢育以為子云

送政常還故園有乙癸春會於京之約

留·爾·將·為·一·壯·遊·麗·譙·無·似·故·園·樓·杜·家·離·酒·難·成·醉·趙·瑟·別·
聲·唯·惹·愁·雲·暗·伊·城·明·日·望·月·凝·寧·樂·幾·年·眸·平·安·已·有·行·春·約·
好·向·花·邊·迎·紫·驪·

絕句五首

咫·尺·是·他·鄉·咫·尺·是·鄉·土·自·慚·榆·枋·間·來·往·猶·愁·苦·
愁·苦·因·詩·切·詩·因·愁·苦·成·詩·中·千·万·字·總·是·故·園·情·
情·興·有·誰·識·風·流·為·客·人·何·處·逢·斯·客·共·話·情·興·親·
親·友·新·與·旧·他·鄉·何·必·無·相·看·兩·不·厭·只·有·一·酒·壺·
壺·邊·醉·眼·覺·二·毛·轉·懶·梳·徐·徐·為·何·事·編·次·新·著·書·

東歸稿刪畢

家兄所著此稿刪外尚有芙蓉詩集帝範臣軌注學庸解注皆未梓此稿刪雖不足施諸大邦我義兄後藤木卿曾為謀上木未就而庚申冬家兄羅病沒矣木臨憾為其似食言使余更促歌劇乃讒得成蓋亦木卿之力而亡兄之志得可以存於世焉云享和三年癸亥初夏

郡山講官 杉山政常誌 (杉山重水 城戸月庵の弟)

「政常之印」「字日周助」

史料二 城戸金作墓碑銘 (光運寺、昭和五年版『四日市市史』所収)

四日市良吏城戸金作墓銘并序

君名富恭字温郷俗稱金作其姓平三浦義明弟杉本太郎義宗之裔其十三世之孫福吉仕于中納言源秀康之男直良直良之子直明天和二年移封赤石福吉從之其子富清是君之父也亦仕而為吏後遇讒致仕入大和為郡山柳沢侯之属大夫豊原飛驒及鈴木出雲之家宰後病而致仕子元順嗣即君之弟也先是君上仕侯藩為伊勢四日市之掾四日市蓋郡山之食邑也迎父富清于吏邸而愛養尽心耳富清以延享四季丁卯參月二十日逝葬光運寺中明和三年進上士之班君為人忠孝亡論謹厚質樸其於政也惠故雖亡赫奕之功而民稱其温厚之德云安永元年癸巳正月十四日逝享年五十七竈窆于先墳之側配吉田氏三男三女長子名賢字公賢俗稱友藏好文好義亦嗣父之職為掾四日市人士有文辭者蓋公賢之所橐籥也五年丙申進班一等于公賢褒賞其勤勞也九季庚子又進班一等移于郡山天明元年辛丑遷于京邸之吏其弟政常冒杉山氏亦為四日市掾乃略記以為序且作之銘銘曰

温恭人矣 忠孝其隆 維德之筱 名照亡窮

皇和天明癸卯冬至彦根前文学伏見之人

艸廬 龍公美字子玉撰併書 (龍草廬)

史料三 城戸月庵墓碑銘 (光運寺、昭和五年版『四日市市史』所収)

月菴城戸先生之墓

月菴先生城戸諱賢字公賢一號芙蓉勢州四日市人也磊落不羈好學精敏先是四日市隸于和州郡山吏涖治焉先生代父為計吏非其志也安永九年徙郡山明年選為京邸吏京師右文之地飯以官暇可以小展駿足矣乃与江北海龍草廬輩日相浸灌於其名詞章大行于一時搢紳朝貴爭願見先生某鄉嘗獲鷺一双先生賦詩上之及後及進鷺禁苑其詩密經內覽經數歲還郡山寬政五年擢為儒官寵賜殊厚其侍經筵推本聖言極論政事得失公悅以為好君也故賚酒食以優之其知遇蓋如此教育子弟尤寬裕未嘗加声氣說詩講史時以談諧笑謔曉之雖里兒巷婦皆為解頤至今郡山及四日市人士挾策不哀者先生薰陶之益矣有賴云性嗜酒飲輒酣暢又善和歌兼巧行草書短章醉墨多為人所傳所著有文集若干卷及帝範臣軌註其他雜著不可勝數以寬政十一年十一月二十七日卒享年五十有六父諱富恭母吉田氏弟政常謹恂有學令補儒官先生初娶伊達氏生男名温出嗣佐伯氏後娶近藤氏生女早亡養荒木某之子為嗣名富一亦在儒員先生之葬在和州矢田村發志院今歲重為墓于四日市光運寺以從先塋安其神也銘曰

生斯達 沒斯名 天之衢 嗚呼亨矣哉

享和二年冬十月

狹貫池桐孫撰 (菊池五山)

五瀨紀長齡書 (四日市宿本陣清水家の縁者か)

弟楢山政常書 (杉山重水)

史料四 城戸月庵墓碑銘 (發志院、『大和郡山市史』所収)

月菴城戸先生墓

先生、姓城戸、諱賢、字公賢、号芙蓉、其敬業館主人之号、先侯所賜、月菴老人之号、君侯所賜也。世事和州郡山侯。考忠岸君、母吉田氏、延享元年甲子夏五月二十二日生于勢州四日市。幼而聰敏、長而好學、博覽洽聞、推誠与人。安永二年癸巳受家政、九年庚子移于郡山、天明元年辛丑冬為京邸吏住京師、六年丙午遷為副大小姓、七年丁未為大小姓還郡藩。寬政五年癸丑春、君侯特命、為儒臣、超十階、遷書院詰。自此稱先生而不名也。時年五十、扈從君侯赴江戶、於尾州鳴海駅館賜杖。回為先生五十初度也。在江戶侍講君侯及婦人世子、屢賜菱章時服、其他賞詞甚多。先生、溫柔謹慎、孝于事親、忠于事君、坎終身不失君寵。其學有志於復古、講習不倦。所著、有芙蓉先生文集、弁道弁名便覽、學庸解釈又註、帝範臣軌、及、開元天寶遺事。郡山及四日市、學芸之盛、皆賴先生訓導之力也。又受花卉、賞買楓木名一行院者一株甚愛之。晨夕諷詠其下。敕家人云、我死必移、此木于墓上。寬政十一年己未十一月二十七日卒、年五十六。葬于和州發志院。先生、初娶伊達氏生一男。名温、字了攻、住四日市。後聘近藤氏、拳一女、早夭。為弟政常女為子、又養荒木氏男為子。名富一、字鄭藏。政常亦有學芸為儒臣。富一、猶少亦在儒臣之列。詩曰、昭明有融、高朗令終、先生有焉。銘曰、

發志之阜 清且幽兮 靈楓之樹 枝相繆兮 呼嗟先生 安斯丘兮

後藤重栄 (後藤木卿)

伊勢 佐伯温 (佐伯如蘭)

尾張 恩田仲任 撰 (恩田蕙樓)
平安 永田忠成 書 (永田西河)

史料五 杉山重水墓碑銘 (発志院、『大和郡山市史』所収)

重水杉山先生之墓

文化四年歲次丁卯十月二十日、重水先生卒。先生、諱政常、字子友、号重水、勢州四日市人。即、月菴城戸君之弟也。先是四日市隸于和州郡山、官吏汜治焉。其計吏操立君無子、請先生為嗣。廼冒杉山姓。先生為人、孝友溫柔、寬裕寡言、喜温不苟見色、人以長者稱焉。少而志于學、從月菴君遊。長而好徂徠物子之學、多所發明矣。又好而賦詩屬文。々則邇秦漢之源流、詩別入唐明之佳境。以其才識非、凡君侯徵移郡藩、擢為儒官、寵遇殊厚。先生、行愈修、學愈進。陪侍經筵、講論典籍。藩中之人士、學益進者、先生薰陶之功、又有賴云。稟命不融、春秋五十五及卒。無人不哀惜矣。越三日、宮墓發志禪院、建石月菴君之墓側。安其友于之心也。先生、娶崎山氏、生五子。長女適崎山喬。次男政善、亦溫柔敦重、現在儒臣之列。次男富全、出嗣城戸氏。次男某与次女、皆幼而在家云。不佞重采、嘗蒙先生之不棄恩、凌骨肉情、如膠漆。遂相許、次刎頭之交、結義為兄弟。一日、先生從容謂重采曰、詩曰死生契闊与子成說、子若先我而死、則我為子銘焉。我先子而死、則子為我銘焉。永懷哀悼、靡所寘念、不敢謝不敏之作。銘曰、嗟乎先生 修業昭守職 淑德純懿 爰銘爰勒 子々孫々 其永維則。

文化己巳冬十月

義弟 勢州後藤重采 謹撰 (後藤木卿)
姪 同 佐伯温 (佐伯如蘭)
友人 同 長谷川慎同 建 (長谷川独甫)

史料六 城戸駒嶽墓碑銘 (発志院、『大和郡山市史』所収)

駒嶽城戸先生墓

先生、享年四十有九、其没在文政丁亥^(十年)六月廿六日、其葬在郡山城西発志院後丘。門人相議建碑。嗣子就余乞銘。先生、諱富一、字止敬、駒嶽其号、廉藏其稱。本姓荒木、有故冒城戸、世列郡山儒班。為人醞籍、篤好學、善文善詩、旁善射若笛。娶杉山氏、有男四人矣。其叔、出嗣飯田氏。其季在家。伯与仲、早世。有女三人矣。其長、嫁富松氏。其余未笄。先生、晚病辞官、乃養姻家子富全、以伝旧業。蓋先考乃志也。富全、字子德、稱勇輔、則乞銘之人也。銘曰、孝子濟美於彼 門人表德於此 於彼乎於此乎 神之格樂胡已。

文政十一年戊子春三月下浣

東讚 藤沢甫 撰 (藤沢東駭)

史料七 原文甫墓碑銘 (松月庵、『蘋藻集』所収)

岐山原居士之墓銘

天保八年丁酉正月十一日伊勢原法橋迪齋君卒距生天明四年甲辰得年五十有四葬于馭外松月菴域中從先塋也遺命表曰岐山居士墓君諱淵字潛

玉一字文甫迪齋其号父諱定勝母向井氏定勝無子君実其兄之子因為嗣初從小岐須村徙四日市表以岐山示不忘其本也君娶高尾氏二男一女長恭威以中秋生因名望字玉蟬克承其家次男女子並天繼室藤堂氏生一男有故離婚庶出四男一夭三皆在童卯君襲父業以医大行家道益隆四方請治其麗不億北勢前後以医鳴者無有能出其右者傍嗜文墨特長于詩余嘗以壬戌客遊其地距今三十六年君猶弱齡就余学詩其人温籍其時清婉遂定雲龍之交東歸以後參商相隔聞其業日盛不復遑吟哦以故双鱼到我間歲不過一二次今春其鄉人吉田蓉浦來赴日咄迪齋亡矣僕發程在正月十二日属絃前一夕往問病且告別時已沉綿謂曰煩子願得五山翁文以慰冥漠伏請見允余聞之黯然胸塞泫然淚下蓉浦又曰迪齋母氏以容歲十二月亡哀痛感愴從是得病竟至不起病中有詩曰阿母先春歸九泉仙灯光闇淚潸然自知吾病今垂死往謁慈顏不隔年果如其言嗚呼至性如此斯人实不易得縱使無知己之言我豈可不文哉銘曰

古有死孝 斯道斯得 大隧之中 真是樂国

狭貫 池桐孫 撰 (菊池五山)

史料八 『蘋藻集』序

蘋藻集序

人之在世也業成名遂而止若夫孜孜汲汲終身奔走名利者固小人之為耳亦不足道也迪齋原翁以医有名其初将学医也先学儒術已通而後学医故其為医也仁義霽如接人親切施治懇到常曰病不癒則不受謝宜哉其能致成業遂名也然而刀圭之余暇講經習礼遂創建諏訪文庫當時所祀文宣王像与所講經史百家之書今猶存焉翁逝五十年有其跡無其人嗚呼哀哉余雖不及識

翁既奉職諏訪神社親見其遺跡不能無今昔之感也今茲三月修理其庫閱其遺書乃為翁修五十年祭需詩歌於知人故旧得詩五十八歌九十奠之祭壇以慰翁之靈既而編為一卷名曰蘋藻集而卷首故揭翁墓誌者欲闡揭翁之遺風令彼奔走名利而不知德義者有所顧慮也時明治二十二年三月於諏訪文庫東廂祠官生川鐵忠識

史料九 生川鐵忠の漢詩（『蘋藻集』所収）

文甫医名北勢伝豊碑況又屹沙辺秘方起死人千数至孝動天詩一篇諏訪庫書虫未食孔夫子像彩猶全誰言遺業無相嗣文学蹤存五十年

史料十 文化十年に頼山陽が四日市で詠んだ詩（『頼山陽全書 詩集

卷八』）

四日市酒楼。見「菊池五山題詩」。戲賦。

馭道狭斜群「黛鬢」。尋「歛無」夜不開「顔」。花鈿籌酒還惆悵。歛却題詩池五山。